

## 各部門の最優秀作品の概要

### 【新築住宅部門 最優秀賞】

作品名「屋内庭のある家」

(入賞者：キノシタヒロシ 氏)



#### (設計コンセプト)

敷地のある鳥取県は山陽側と比べて雨の降る日数がおよそ2倍多く、積雪もあるため外部庭の有用性に恵まれていない。そこで、本来外部にある庭を屋内に取り込み、部屋と屋内庭を織り混ぜた住宅を提案した。屋根は全面半透明とした。それにより屋内庭は、純度の高い自然素材である陽光で満たされ、可動式テントの開閉の程度により日射量を調整し、屋根裏に設置した換気扇の排気風量を制御することで温度の調整を行う。

入れ子状に設けた部屋にはしっかりとした気密性と断熱性をもたせた熱的境界を敷き、24時間換気を利用して部屋内の空気を循環させて快適性を保つようにしている。屋内庭にもソファ、書斎机、本棚、ハンモックなどの家具が置かれ、太陽光の下で読書したり子どもと遊ぶなどして過ごせる。

空間の快適性を考えていくとき、面積を広げたり天井を高くしたりと空間の容積を大きくして開放性をもたせていく方法がある。しかし、山陰のような気候が厳しい地域では、空間の容積が大きくなると空調効率が落ちてしまい、より容量の大きなエアコンやストーブが必要になる。この住宅では核となる居住スペースは小さな気積でまとめ、それぞれを小さなルームエアコンで空調し、その空気を居住スペース内で循環させている。小さな気積の部屋と大きな気積をもつ屋内庭とを織り混ぜたような構成によって、温熱環境の厳しい季節は小さく暮らし、過ごしやすい季節にはサッシを開放してのびのびと過ごす。

#### (審査委員講評)

大きな気積の中に巧みに配された小さな居室によって、屋内にいながら外部を感じることができる豊かな住空間を実現している。この地における気候風土を加味した大らかな一室空間の構造と、コストコントロールを踏まえた材質の組み合わせにより、暮らしの多様さを生み出す意欲的作品である。

## 【リフォーム住宅部門 最優秀賞】

作品名「広葉の家」

(入賞者：高吉 輝樹 氏)



### (設計コンセプト)

5人の子育ても終わりかけたころ、ご主人が突然の病で他界された。「落ち着いたら取り掛かろうね」と二人で話をしていたリフォームが、奥様の念願となった。「健康」な住まいとは何か、建築における「健全さ」とは何か、という問いに答えることが、今回わたしに与えられた役割に思えた。

太陽蓄熱を利用した室内温度の安定化、アルミ押出材と木製の複合サッシによる高断熱化、セントラル浄水器を使用して上水の塩素や汚れを除去、そういった基本的性能を上げていった。しかし、性能は次々に新しい技術が登場して古くなっていく。年月が経っても色褪せない全体に通底する考え方はないものか。

民藝では「無事」とか「健康」という表現をする。一緒に暮らす食器や、衣類、家具などを選ぶ際に、「健全さ」を第一の物差しとする考え方である。日本では良くも悪くも茶道の影響があり、凝った遊びに走りがちとなる。その点での良識を目指しているのが民藝で、「健全さ」を心掛けようと勧めるのである。民藝は、「材料が天然材であること。手仕事によること。伝統に沿った技術で作られること」この3点がまず求められる。これを建築にも取り入れることを考えた。

建築は、残念ながら音楽のように一瞬で人の心を高揚させたり感動させたりはできない。ただ微力ながら、少しずつ影響力を発揮しており、その力は相対的に見ても大きなものである。建築とは人間の生を支える存在でなければならない。

### (審査委員講評)

OMソーラー<sup>※</sup>やセントラル浄水器等の設備機器、高性能な断熱材やサッシの採用に留まることなく「民藝」の精神を抛り所に仕上げやディテールを考えたリフォーム作品です。天然木や塗り壁等の自然素材にこだわり、健康でおおらかな空間に好感が持てます。また密度のある植栽もこの住宅の価値を一層高めています。生活風景を思い描かせると共に設計者の卓越した手腕を感じさせる作品です。

※ 太陽の熱で空気を温め、その空気を暖房や給湯、換気等に利用するシステム

## 【学生部門 最優秀賞】

作品名「四季を旅する巣まいー燕ツバメから学ぶ気候によって変化する暮らしー」

(入賞者：矢澤 青大 氏)



### (設計コンセプト)

燕は、春と共に日本に訪れる。

渡り鳥である燕は、快適な居場所を本能で知っている。燕は、現地調達した泥と草を使って、住宅の風通しの良い軒先などに巣を作る。燕の巣作りを参考に、内部と外部、両方の特徴を持つ中間領域について再考することで、快適性を担保しつつ、自然環境との共生を可能にする豊かな住処を作れるのではないだろうか。

そこで私は、自然環境との接点となる中間領域に着目し、四季の変化に応じて間取りを変え、中間領域が変化していく住処を設計する。

敷地は、静岡県浜松市引佐白岩のみかん畑。地名の通り白岩という地層からなる自然豊かな地域である。この地に建つこの住宅は、建材に白岩でとれた土、木材、竹を燕と同じように現地調達し、伝統的な竹小舞土壁で制作される。間取りを三層の土壁によって構成し、角度を振った台形にすることで、空間に大小が生まれ、多様な居場所が出来上がった。三層の壁に備え付けられた建具の開け閉めで壁と壁の間の中間領域が拡大縮小し、住民は季節の変化を全身で享受する。

土壁による三層のレイヤーは蓄熱・蒸散することで住居内に微気候を作り出し、快適な居場所でありながら可変性のある住処となることを許容する。夏には、外側二つの層を開放し涼しげな空間が拡張され、春・秋には内部と外部の空間を等しく楽しむ。冬には三層目の建具を閉じ、住宅全体が温かな空間に包まれ、燕がみかん畑を飛び回るところ再び春がやってくる。

### (審査委員講評)

間取りが変わり、住み手が移動しながら暮らすという斬新な設計プランは、一見、現実性を疑ってしまいました。しかし、それが季節の移り変わりを住みながらに感じさせ、建具を巧みに使い可変する半屋外の空間で、人間の住みこなす能力を引き出す温故知新のものだと正当性を帯びてきます。静岡県のみかん農家を想定したプランですが、敷地の場所を問わず広く応用できる普遍性を感じました。